

編集後記

本誌は、創刊号以来、毎月テーマを決めて、極めて独創的な論文を掲載しつづけてきた。そして、その成果を世界にひろめるために、英文抄録をものせるようになった。これほど意欲的な雑誌はほかに類がないであろう。しかしその反面、あまりにも急速にプランを遂行してきたために、多くの貴重な論文の掲載を忘れてしまいがちであった。本誌が広く愛読され、高く評価されるにつれて、全国から多数のすぐれた論文が集まってきたのに、あるものは1年以上も未掲載のままである。そこで、今月号は今までの編集方針を少し変えて、早期癌とその周辺の症例を特集することになったのである。

さて、本号の論文をみると、粘膜下の腫瘍にしても、胃の結核や梅毒にしても、また、自然に脱落したポリープ例、さらに早期胃癌の多発、重複、合併例や経過観察例などにしても、ごく当然のようにきれいな写真をかかげて、堂々の論陣をはっている。恐るべき底力である。また、研究欄では、各著者が自信をもって書いている。いずれも教えられることが多い。明日からの研究か診療にもすぐに役に立つであろう。

現在、わが国では早期胃癌の報告よりも他の疾患の症例報告の方がはるかに骨が折れる。早期胃癌なら身近な文献だけで十分間にあうが、他の疾患の症例報告となると、古今東西の文献を読みあさったうえで、その症例の文献学的位置づけをしなければならないからである。そのくせ早期胃癌の論文に比べて、とくに良性疾患の論文はとくに過小評価されがちである。しかし、今月号の著者の方々もまた、当然のこととして地道な作業をして下さったことに改めて敬意を表したい。お蔭で私どもは各種の疾患の輪廓を正しく理解できる。

＜熊倉 賢二＞

 ＜編集＞ 早期胃癌研究会